こみねライブラリー

動物風土記 2

イタチ●イヌ●サル●キツネ●タヌキ●オオカミ

田淵実夫著

小峰書店

こみねライブラリー

動物風土記 2

イタチ・イヌ・サル・キツネ・タヌキ・オオカミ

田淵実夫著

小峰書店

380.4　動物風土記・2　207 P.

著者紹介

田淵実夫（たぶち じつお）
1909年広島県三次に生まれる。
旧制中高校・大学教官，広島市立図書館長等をへて現在広島比治山短大教授。民俗学・言語学専攻。
著書に「石垣」「筆」「新日本風土記」「日本縦断随筆」等がある。

動物風土記 2　980円

1980年7月20日　第1刷発行

*

著　者　田淵実夫
発行者　小峰広恵

本文組版／type＆たいぽ
印刷／三秀舎　製本／文勇堂製本工業

発行所　株式会社小峰書店
160 東京都新宿区舟町6　☎(03)357-3521
振替口座　東京6-195544番

8339-7203-2349
©1980

はじめに

動物の話ほど人々が興味をもつものはありません。人が動物の話に興味をもつのは、人に動物のことをよく知っておこうとする本能があるからです。他の動物のことをよく知っていなくては、人間は長いあいだ生きつづけてはこられなかったのです。

石器時代に人間の遠い先祖が住んでいたほら穴のかべには、野牛やウマやトナカイなどの絵が残されています。それらの絵は、古代の人間が、それらの動物を狩りの目あてにしていたことを語っています。それらの動物は人間の食物となるたいせつな動物だったのですが、反対に古代の人間は猛獣やヘビ・ワニなどにえものとしておそわれる危険にもさらされていたのです。古代の人間にとっては、そのどちらの動物も、大きく自分たちの命につながっ

ていたので、それらの動物を神としてあがめるばかりか、なかにはそれらの動物を自分たちの先祖だと信じる者さえいたのでした。

そのような深い動物とのつながりの中で、人間はだんだんと多くの動物を手なずけて、自分たちの生活に役立てるとともに、手なずけられぬ動物とは必死に戦いあってもきたのでした。そして、そのうちに、人間は、どんな動物にも、しだいに愛情と賛美の気持を深めていきました。たえずかれら動物の動きを見守っているうちに、かれらのもつけなげさもたくましさも、くわしく知らされてきたからです。わたしたち人間のあいだに、かれら動物をめぐるとりどりの行事や物語が生みだされてきたのは、みんなかれらに対する愛情や賛美の気持があったからのことです。

日本でも、冬の夜、いろりをかこむ山里の人たちのあいだで、いちばんにはずんだのは動物話でした。幼い子どもたちは、動物をめぐるいろいろな行事に参加したり、それらの行事を見守ってきたりしていましたが、さらに、おとなたちから聞かされる動物話は、胸ときめくほどにおもしろく、動物の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ことばかりでなく、先祖の人たちのことまでもよく承知させてくれるのでした。時代はすすんでも、人間と動物とのかかわりあいの歴史には、まだよく明かされていないふしも多いのです。

この本では、イタチ・イヌ・サル・キツネ・タヌキ・オオカミの六種類の動物についてお話ししました。

昭和五十五年　五月

田淵実夫

目次

はじめに

＊

もちまつり●イタチの話……7

友情八〇〇〇年●イヌの話……27

とっぴん三助●サルの話……59

にがいしっぽ●キツネの話……99

穴ひろい●タヌキの話……129

兵坊太郎●オオカミの話……153

＊

解説　谷川健一

造本設計／粕谷　弘
装画・さし絵／田代三善
写真資料提供／今泉吉典
渋谷行夫
鈴木光生
高知県庁
交通公社フォトライブラリー
国立科学博物館
駒ヶ根市役所
青竜山茂林禅寺
東京動物園協会
日本警察犬協会
和歌山大学

もちまつり

●イタチの話

一

みなさんはイタチといえば、きっと、あのす早く道を横切ったり、夜のあいだに鶏小屋のニワトリをおそったり、いつのまにか池のコイをかすめていたりする、チンピラ強盗のようなやっこさんを思いうかべることでしょう。

そうです。そういえばたしかに、イタチは、ずるく、はしこく、そしてようしゃ知らずの小悪党です。

みなさんの中には、イタチがネズミをとるのを見た方があるでしょうか。イタチがネズミをとるには、イタチ一流のいろんな変わり手を使います。

野らなどで、ネズミのえさをあさっているのを見かけると、イタチは遠くの方からキチキチと鳴きます。その鳴き声を聞くと、ネズミはとっさににげかくれますが、しばらくすると、また、チョロチョロとえさのあたりへ飛びだしてきます。なんだかうす気味は悪いが、えさの方が思いきれないのです。すると、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

イタチは、こんどはずっと遠くの方でまたキチキチと鳴きます。

ネズミは、はじかれたようにすぐまた逃げ腰になりますが、危険の遠ざかっているのに気づくと、かえって安心して、むちゅうでえさにかじりつきます。

そうして、ネズミがわれをわすれてえさをむさぼっているうちに、イタチは遠まわりして反対側にかけていき、小みぞやあぜうらなどをつたってしのびよると、あっというまにネズミをせしめてしまうのです。

この手でネズミをとるのは、わたくしも近所の牧場などで、さいさい見かけたことがありますが、それがイタチの第一戦術です。イタチはこの戦術のほかに、さらにもう一つ、第二のすばらしい戦術をもっております。

その戦術というのは、昔から「イタチの桁返し」とよばれているものです。これは、たいてい納屋や天井うらなど、屋内でこころみます。屋内でなかったらちょっとつごうの悪い

ホンドイタチ

戦術ですが、それだけに屋内でなら、百発百中、みごとに成功する戦術のようです。

ネズミは納屋の土間などで、ネコやイタチに追われるときには、クルクルと何度でも壁ぎわにそうて走ります。あわてているのと、じっさいにせわしないのとで、どこに飛びあがるひまもにげこむすきもないのです。ちょっとでも身をかわそうとすると、そのとたんにやられてしまいそうなのを、ネズミはもう、全身に感じているのです。

たとえ、納屋の戸口が大きく開いていても、追いまわされているかぎり、めったに外へは飛びだしません。ネズミはがんらいやみの動物です。ふいに明るいところへ飛びだすのは、いっそう不安を感じるばかりか、すみなれたやかたならきっと逃げ口があるはずだと、何度もそうしてかけまわるのです。

追いかけているイタチは、その時、にわかにすみっこの桁板をけってターンするのです。その結果はいうまでもありません。息せききってかけていたネズミは、とつぜんなイタチのお出むかえをうけ、あやうくはちあわせをするとこ

イタチのからだは細長く足は短いがすばしっこい。

ろで、がっちりとくわえこまれるというわけです。

野生の灌木(かんぼく)に、イタチノケタガエシという木があります。この名は辞書にも出ていて、ほんとうの名はガマズミという木です。アズキつぶを少しひらたくしたような実をかんざしのようにつけるので、ヒメノカンザシなどとよんでいるところもあります。この木の別の名をイタチノケタガエシというのは、ひどくねばり強い木で、うっかり折りとろうとすると、急にはねかえって、しっぺがえしをくうことがあるからです。

「イタチの桁返(けたがえ)し」は、そのように、もののたとえ名にさえなっているほど、じっさいすごい戦術です。

いなかの家などに行くと、ネズミがよく天井(てんじょう)うらをかけまわっています。ところが、とてもネズミのはねたのだとは思えない、びっくりするほど大きな物音がして、

たちまちネズミのひめいをあげるのを聞くことがあります。そんなときは、たいてい、ネズミがイタチのこのおくの手にかかってやられたときです。イタチは木登りはできませんが、ものからものへつたわってなら、どんな高いところへでも登ります。鼻がとてもよくきくので、えものくさいと思えば、屋根うらへでも荷山（にやま）の上へでもしのびよっていきます。

二

イタチのねらうえものは、おもにモグラやネズミ、鳥や魚ですが、そういうものをあさり歩くひまひまには、イナゴやバッタなどの昆虫類から、カエル、トカゲ、ヘビ、貝類など、自分たちより弱い動物なら、何でもかまわずとらえて食うようです。

イタチは、冬から夏おそくまでは、山おくの谷間などにかくれていて、秋近くにならないとめったに人里へは出てきません。それで、イタチは田んぼにカ

エルのいるあいだは穴にばかりかくれていて、カエルがいなくなるといれかわりに出てくるのだ。それはカエルにオシッコをかけられるとからだがくさるからだなどといわれていますが、もちろん、でたらめないいづたえです。秋ぐちには、イタチがよくカエルをくわえて走っているのを見かけます。

イタチはえものをとらえれば、肉を食うよりも血をすうのが専門です。ニワトリなどをおそったときには、ほかはちっともきずつけていないのに、首だけはかみ切って血はすっかりすいとっていることがあります。コイをとらえたときにも、首っこにポカリと穴をあけています。イタチを冷酷（れいこく）な動物のようにいって人がいやがるのも、そういうやり口を見聞きしているからです。

イタチがニワトリやコイをねらうのは、たいてい夜のあいだです。鳥もニワトリやアヒルばかりでなく、小鳥はもちろん、時にはカモやガンなどの寝こみまでもおそいます。わたくしのしたしい農夫の人も、いつかある夜道で、カモがけたたましい鳴き声とともに、イタチをふりおとして飛びたつのを見たと語ったことがあります。コイなども、夜分ならば、イタチの池に飛びこむ水音に

ニホンカワウソは数が少なくなり，めったに見られなくなった。

気づいて家の者があわてているあいだに、かれらではもてあますほどのものを、もう完全にいためつけています。

こういうと、いかにもゆだんのならない、てきびしいイタチですが、しかしどんな動物でも、思わずほほえましくなるような、ちゃめっけの一つ二つはもっているものです。イタチもやはり、一面にはそういうおどけたくせをもっております。

まず、おもしろいのは、イタチはものをぬすみだすと、食べもしないのに、それをつぎつぎとひとところにつみかさねておくことです。このくせは、イタチの親類のカワウソにも見られます。ただ、カワウソの運んでくるのは魚ばかりなのに、イタチのほうは魚から卵、おもちやほしイモまでも引いてきます。

イタチはそれらのぶんどり品を、ただごちゃまぜにつみか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com